

『小泉小太郎』伝説

そのふもと、塩田平を潤す産川の上流（沢山湖の直ぐ下）に、大きな岩が点在する神秘的な溪谷うみやがあります。



製作所：西塩田地区振興会
住所：〒386-1433 長野県上田市手塚
製作日：平成19年1月1日初版

昔、独鈷山いただきの頂にお寺があり、若いお坊さんが住んでいました。このお坊さんのもとに毎夜美しい娘が通ってききました。真夜中に何処どこから来て何処へ帰るともわからない。お坊さんは長らく暮らすうちにいぶかしく思い、ある夜、娘の着物の裾に針をつけ、糸を繰くり出しました。夜があけてみると、糸は戸の節穴ふしあなから抜けて山の沢を下り、川の上流にある鞍くらが淵ふちの岩窟の中まで続いています。

見ると大蛇がとぐろを巻いて、赤児あかこを産もうと苦しんでいる様子。お坊さんは驚いて逃げ帰ってしまいました。娘は鞍いさなが淵ふちの主の大蛇の化身けしんでした。大蛇は刺された針はりの鉄の毒のために弱り、かつ自分の姿を見られてしまったことを恥じて生まれた児を鞍岩くらいわの上に置き、自分はこ
こで死んでしまいました。

そのためこの川の名は産川うぶがわといわれるようになりました。
その後、大雨が降って洪水が起こり、大蛇の遺骨は下流いこうに流され、蛇骨石として散らばりま
した。

生まれた児は小泉村の老婆に育てられ、小泉の小太郎と名づけられました。

小太郎が十四、五歳になった頃、老婆が「我が家はさほど豊かではない。年ごろの養育も容易ではない。今は一人前の大人になったのだから、婆のために少しは手助けをしておくれ」といいました。

小太郎は生まれつき小兵(こひょう)ではあったけれども、毎日、大食(おほく)して何一つ仕事を
したことがありませんでした。

そこで小太郎は小泉山に出かけ、薪取りをしました。そして一日で山にある限りの萩の木を根こそぎにして力をこめてたつた二抱えほどの束にして夕方帰ってきました。そしてお婆さんに「この結び縄を解かないで一本ずつ抜いて焚きな。山中の萩の木だからな」といいました。

老婆は「よしよし」と答えたが腹の中で「一日仕事で山中の萩の木なんぞ取れるものか。こんなに小束にまとまるものか」とこぼかにして、小太郎の留守に結び縄を解いてしまいました。すると萩はたちまちはぜくりかえって家一杯に広がり、老婆は萩に押しつぶされて死んでしまいました。それから後、小泉山には萩の木は一本も生えていないといわれています。

また、小太郎の子孫は長くこの地に住んでいるが、横腹に蛇の鱗のあとがあるといわれています。

(参考 小縣郡民譚集)

童話作家の松谷みよ子さんは、この「小泉小太郎」と松本・安曇野地方に伝わる「泉小太郎」伝説をあわせ、なおかつ、秋田県の八郎潟に伝わる岩魚三匹を一人で食べてしまったために龍に変身した物語から「龍の子太郎」が創作された世界的な童話の名作がうまれました。

鞍が淵は「龍の子太郎」のふるさといえます。